

平成26年11月5日発行(毎月5日1回発行)
第54巻11月号(通巻664号)

風土

創刊55周年記念号



11

白 露 神 蔵 器

満月の上りきつたる神田川

神田川むかしの盆の中流れ

桂郎に晩年の無し菊脛

これやこの這つて四・五尺茗荷の子

八月やがんじがらめに心電図

爽涼や朝夕七種薬飲む

清水寺に「舌切茶屋」てふ涼しかり

智慧ぬすむ二粒三粒黒葡萄

日本のへソてふ杉並亀鳴けり

座禅組む金輪際の烏瓜

警策の四尺二寸ほととぎす

白露のことに金剛蛇笏かな



五十五周年を迎えて

神蔵 器

俳句は受身の文芸と言う人がいるが、私は極めて積極的、且つ能動的なものであると心得ている。眼を皿のようにしてよくよく見極めよと言われても、よく見詰めれば見詰めるで美しいことばかりが見えてくるものではない。特に私は季語は俳句の生命と心得ている。私をはじめて先生の御宅をお訪ねした折、秋桜子先生に「桂郎さんはウソつきだ。『雨ながら雪降る中の初蛙』なんてありますか」と言われた。「先生！私も先月（二月）雪の降る中に、たしかに蛙の声を聞きましたよ。『そうだろう、そうだよねエ、君もウソつきになりますよ』と笑われた。

「習へといふは、物に入つてその微の顯れて情感するや、句と成る所なり」（三冊子）（微は幽微、奥深くかすかなこと、対象物の中に自己を没入し、物と我とが一致したとき、物の奥底にひそむ生命が現われる）という。

その後、虚子の写生論によると、「写生ということは、只写すといふことではなく、作者がその景色を見てその心に映じた影を描くのである。その影は実物その物とは異なつてゐるのである。其の美は客観にもない、主観にもない。主観が客観に働きかけて或假象を作る」。七田谷氏の「写生論ノート」によれば飯島晴子の場合、晴子の言葉の其假象に存在するものであるというのである。向こうに、言葉を通して現実にはない或る一つの時空が顯つかどうかというのが一句の決め手である。写実でない言葉の向こうに詩としてのリアリティが現われていなければ俳句にならない。

「風土」今年十月、創刊五十五年を迎える。今日九月九日は仲秋の名月、是非ともと期待していたが真夜中まで曇り空で残念であつた。

竹間集作品抄

山蟻が萩のうねりを這ひのぼる

南 うみを

診察に呼ばれてたたむ秋扇

宮川みね子

こふのとりを育くむ里や天の川

浜 福恵



にはとりを見てゐるだけや秋の風

山田 暢子

結願の鐘の余韻に夏惜しむ

門伝 史会

田植まだ終らぬ喪家半夏生

野沢しの武

千六百字依頼草稿涼新た

鈴木 石花

虫鬼灯淋しき盆の過ぎにけり

岩木 茂



厩舎より床蹴る音や星月夜

相沢有理子

手のひらを返せば秋の風が来る

小林 輝子

雁来月人生絵巻ひもときぬ

小野寺節子

一つづつ消ゆる想ひ出螢かな

田村すゝむ

秋季大祭嫌ひな顔は靖国へ

塩田 博久



威銃百戸の村の弾けたり

田中佐知子

灯明に遅速の揺らぎ朝桜

工藤ミネ子

住職に戻る校長秋扇

柴田 久子

秋あかね群れゐて「ダリはここにいます」

中村 洋子

湖中句碑消えしあふみの秋霞

橋添やよひ



銀漢や背骨一本にて立てり

浅田 光代

朱夏の夜の重き祝事告ぐ電話

柿沼 盟子

すこやかに老いて今年も水落す

高村 令子

御神輿の庫に納まり夏の月

土井 三乙

八月の山川ホテル五千尺

根岸 善行



銀河濃し真夜の黒菱平行

林 いづみ

特別作品抄

老鶯に応へて棚田そよぎをり

乳母車水田明りを渡りゆく

ものの芽の色信州に入りけり

黄落や一寺十戸の隠れ里

浅田 光代

中根 美保

根岸 善行

高村 令子よし

遠く来て吉野にねまる桜どき

土井 三乙

万葉の里せせらぎと夏燕

小林 共代

春惜しむ遠淡海の関に立ち

間島あきら

新緑の里に棚田を数へをり

林 いづみ

夕焼けて大海原のあるばかり

内藤 静

奥庭の自然にかへる緑雨かな

柿沼 盟子

夕立や本堂濡れ縁人いきれ

森屋 慶基

北面は雑木の背山雪明かり

上辻 蒼人

夏つばめ親子元気のメール来ぬ

森高 武

清秋に宮島詣で果たしけり

吉永すみれ

青砥橋に立ち故事しのぶ返り花

遠藤逍遥子

奈良歌の舌頭千回ほととぎす

雨宮 桂子

峰雲や千年杉の立ち競ひ

池田 光子

提督のペリーアイランド山笑ふ

下山田美江

帰国して庭先に聞く四十雀

安永 圭子

始まりと終りは見えし遠花火

奥田 茶々

夕焼の岬に抱かれ眸句碑

森田 節子

名山を指呼に龍太の青山河

落合 絹代

重ね摺る版画に塗り込む寒月光

石碕 浄

一隅に百年の杜夏木立

須藤美智子

芳しき三月の風身ほとりに

池田加代子

校内探検一年生の花日和

上村 葉子

三送会終へり泰山木の花

中嶋 陽子

円空の空は無限の星月夜

大森 尚子

仏にも熱き茶を入れ秋の声

佐山 五稜

山河集

同人作品



神蔵
器選

函館

五句

岡本尚子

烏賊釣火宙と溟うみとの鏝くわに
玫瑰や古びし墓に星条旗
一握の砂浜夏の怒濤かな
啄木の砂を蹠くわに夏の果

独活の花海鳴りの見ゆ墓なりし
大場光よし

秋彼岸地図を片手に僧一人
心電図二百十日の落差あり
竜の舞ふ琉球壺に古酒鳴けり
盆僧と一つ吊革に揺られけり

松手入地下足袋の人ちらし食ふ
生田恵美子

秋燕の何処を返すも出穂期
竹の秋蔵持つ家に水流れ

盆僧に鍵なき家を明け放ち
扁平の蹠くわに処暑の板場かな

遠藤道遙子

かなかなや羅漢一書を読み継げり
シュトラウスの野外演奏夜の秋
水澄むや近江の海の湖中の碑
帰路に聞く仕掛花火の大音響
砂浜に火を焚くサーファー炎天下

台北はレースの宝庫家苞に
生田作

新涼や木の匙で食ぶ朝の粥
台風抜けて灯の新しき麓かな
師の色紙より秋天へ窓開く
午後の足投げだす秋の畳かな
湖の色天高うしてきはまれり

風土独語／神蔵器



家系図に鉄斎のゐる秋扇

岡本 尚子

「家系図に鉄斎のゐる」には、全くびつくり仰天した。彼女は京生まれの京育ち、結婚して現在の地に来た由、歳はとつてもまだ若く、言語・振舞いに京風がいい、人品いやしからず誰からも好かれ親しまれている。

一方鉄斎は、いまさら私などの言うまでもなく、南画家、近世日本画壇の巨匠。特定の流派に位置づけるには、あまりにも自由であり、豪放な水墨画があると思えば、洋画も眼を見張るほど豊潤な色彩の作品などがある。

特に鉄斎は京都の人であるばかりでなく、明治六年から主に神官として生活を送っている。彼は神社復興のために力を尽くし、絵を描いては寄進をしたと言われている。明治十三年以来は、京都の室町に住み、以来、死ぬまで文人画家、学者としての生活を送っている。名声は高まる一方であったが、高まつても依然として探求の精神は厳しく、少しも高ぶらず、使いに来た小僧さんにも平気で作品を与えたという。

私は鉄斎はもつと遠い人のように思っていたが、大正十三年、八十九歳で亡くなっている。句の家系図とあるのは本家の家系図であろう。作者の尚子さんからすれば、四代前ぐらいの曾祖父と

並んで二男猷輔（鉄斎）とでも在るのであるうか。代表作に「山莊風雨図」「竹楼不朽図」など有名であるが、「童而不驕」は鉄斎の死んだ年の作品で、翌年の正月に友人たちにおくる絵を前年に描いてしまったという絵である。写生を超えて対象の内部にせまる鉄斎の気力のはげしさである。

八月や六日・九日・十五日

豎山 道助

二十年八月六日は広島に原爆投下があり、約十四万人が被爆し、二日おいた九日には午前十一時二分、長崎が被爆した。そして二十年八月十五日は終戦日と言いたいが敗戦日である。

二発の原爆はもとより、南方の戦線も急を要し、八月十四日御前会議の決定が出され、翌十五日正午、戦争終結の詔書がラジオにより全国民に伝えられた。

なお、私は広島に原爆一発で十四万人の被爆者と書いたが、これはすでにお亡くなりになった方々である。原爆の後遺症で苦しむ人々はなお多く、毎年、新たに何名もの方々が追葬されておられる。もし、原爆でなく、本土上陸戦があった場合は、百万人以上の戦死者が出たであろう。早く戦争を終わらせ、犠牲者を少なくするためにはやむを得ないことだった、と言う人もあるようだが、これは何の言い訳にもならない。

よく戦争は、七十年周期ぐらいにおけると言う人がいるが、来年は戦後も七十年、日本の平和憲法も、いろいろ取沙汰されていく。大変心配である。（以下略）

風土集



神蔵器選

ひまはりの迷路や子等の長き日々 相模原

岡本尚子

家系図に鉄斎のゐる秋扇

編笠に隠るまなざし盆踊り
帰り来て鍵穴に昼の暑さかな

風を押され玫瑰の岬巡りけり
鴨川の濁り猛るも大文字 川崎

内藤 静

迎鐘いまおくり鐘 鱗雲

秋風やここ六道の辻にふと
秋扇帯のあひより取り出せり

哲学の道とんぼにも好きな道
南無大師東寺の目高列をなす 福生

雨宮 桂子

大仏の背中に塩辛とんぼかな
江ノ電や小さき窓の大西日 吉田火祭

火祭の山へ踏み入る焔かな

玉串は芒の穂なり山じまひ 川崎

豎山道助

八月や六日・九日・十五日

果たさざる約束一つ夏終はる
饒舌のやがて沈黙夜の秋

出さざりし辞職願も曝すかな
蟬の穴あの世へ急ぐものばかり 伊東

吉永すみれ

一杓の水の重さよ原爆忌
爽涼や棹一本の渡し舟

稲架ときて村中軽くなりけり
門火焚く母に告げたき事幾つ

鳥渡る太平洋を傾けて 阿南

島 玲子

旅に立つ子よりの電話秋出水
夕ヒチより暑中見舞の走り書き

満潮の潮入川や野分あと
子に送る芥子漬なる秋茄子